

縣公一郎・稲継裕昭編『オーラルヒストリー日本の行政学』（勁草書房、2020年）

北山俊哉

本書は、2016年から3カ年にわたって組織された行政学説史研究会の成果である。この研究会は、縣公一郎、出雲明子、稲継裕昭、伊藤正次、大西裕、大山耕輔、牧原出、松田憲忠、山谷清志から構成されている。「第二世代」（同書p. ii）の9人の行政学者の講演と、オーラルヒストリーの形での質疑応答が行われ、それを記録したものである。

その9人とは、片岡寛光、村松岐夫、大森彌、中邨章、今村都南雄、水谷三公、水口憲人、橋本信之、森田朗（厳密には第三世代？）である。第一世代としては、「蠟山政道、辻清明、田村徳治、長浜政寿、吉富重夫、足立忠夫、吉村正」の名前が挙がっている。聞き手の研究会のメンバーは第三世代に当たることになる。

本書の9人は、片岡が34年生まれで少し早い、40年生まれの村松、大森、中邨の3人と翌年の今村の集団（本書には登場しない西尾勝は38年生まれ）があり、水谷と水口が終戦直前だが、48年の橋本と合わせて紛争世代、51年が森田となっている。日本行政学会の創立30周年を祝った年報行政研究第17号では、辻清明「私の行政学」、足立忠夫「行政学と私」という論文が冒頭に置かれ、西尾勝「日本の行政研究」、村松岐夫「行政学の課題と展望」、片岡寛光「行政学の現状と課題」、今村都南雄「アメリカ行政学の受けとめ方」と続いた。さらには、「戦後状況と行政研究」というタイトルのもとで、阿利莫二、加藤一明、赤木須留喜、高木鉦作による座談会が君村昌による司会で行われている。この座談会のメンバーは、上の第一世代の教えを受けた世代である。本稿では、この座談会にも言及すると同時に、行政学者ではないが、本書の9人と同時代人で

ある大嶽秀夫（43年生まれ）のオーラルヒストリーが最近刊行されたので、それにも必要に応じて触れたい。

本書は通常の書評の対象となる単著ではなく、取り上げられている行政学者も聞き手も同様に多いため、著者の議論の要約および論評という書評の体裁をとることは難しく、評者による「読書ノート」という側面が強くなることをお許しいただきたい。

#### 本書の概要

本書の作成の具体的な手続きは、「メンバーの中でご講演者に学問的に最も親しいメンバーが、可能な限り、次のような論点に言及いただくよう質問事項をまとめ、あらかじめご講演者にご覧いただく運びとし」、その上で講演が行われたという。論点として挙げられているのは、「学問を志された契機と経緯、研究における方法論と重点、研究者としての社会のご貢献、教育者としてのご見解、日本における行政学の今後」の5点である。

対象の人物によって、この5点の重点の置き方は異なっている。研究と社会的貢献のバランスは特にそうである。しかし以下では、むしろ共通点や同時代性に着目していくこととする。

#### 留学体験

まず、第二世代の行政学者にとってもつ留学の重要性である。片岡は早稲田の博士課程を卒業して、1963年から64年夏までカリフォルニア大学バークレー校に留学している。片岡によると「その頃行政学者はUCバークレーに集中していたの。ワルドーも、フレデリック・モシャーもいた。」(p.17)

村松もまた60年代の後半に同校に留学している。大森は1976年にハーバード大学に留学したが、1年足らずで、これまたバークレーに移って1年ほど過ごしている。中邨の場合は、他の8人とは異なって、関西学院大学を63年に卒業後、バークレーの2年生に編入している。その後、サンノゼ州立大学で修士号、南カリフォルニア大学で博士号を取得しており、第一世代からの教えを受けたわけではない。

この4人の後は、場所的にはもう少し多様となっている。今村の場合は、78年から2年間UCLAに行っている。水谷は74年から2年間イギリスへの留学、水口はニューヨークに留学であり、その滞在が二人のその後の著作に大きな影響を与えている。橋本には留学の記述がないが、森田と同様に80年代にバージニア大学に留学している。森田はハーバード大学からアラバマ大学への留学である。このうち、学生、院生として留学しているのは、中邨だけのようであり、大学院への留学が増えてくるのは第三世代になる。前述の座談会では、1950年代に留学に出た話がないことと対照的である。

#### ワルドーとサイモン

次に、9人に多く言及される学者が、ワルドーであり、サイモンである。片岡の章にはワルドーとサイモンをライバルとして比較するなど、頻繁に登場する。村松章にはサイモンを勉強して紹介論文を書いたこと、サイモンの組織論からも権力構造を突き止める政治学の主要課題へ進めたことが述べられている。大森章では、西尾、大河内繁男と

3人でワルドーを輪読したこと、ワルドーの「プロフェッショナル・アプローチ」を念頭に置き、これについての論文を年報行政研究に書いた記述がある。

中邨章でもワルドーの1968年論文、New Public Administrationが、当時の政治学・行政学の垣根が低くなってきた状況を象徴するものとして指摘されている。今村もワルドーとサイモンの突き合わせが研究の出発点にあったこと、サイモンの見立ての方に依拠していたことを述べている。橋本にとっては、サイモンが主要な研究対象の一つであり、研究のベースになっていたという。森田章では、日本の研究者が必死に勉強してきたサイモンなどの行政学者の立派な業績と、それとは対照的に非効率な、80年代アメリカの一般的行政とが対比されている。

他方、前述の座談会でもワルドーが登場しており、終戦直後の物資がない中で、一冊全部をタイプ印刷したワルドーの本を研究会で読んだことが記されている。もっとも、戦後すぐは「実態調査」がこの世代によって盛んに行われており、アメリカ行政学の吸収は1950年代になってからだったようである。

#### 現代日本の実証的分析

アメリカ行政学の理論研究とは別に、現代日本の政治行政の実証的な分析で、この世代の行政学者達の果たした役割は大きい。いつ、どのようにしてこの潮流の変化が起こったのだろうか。森田が助手に採用されたのは1976年で、「それまでの行政学は、主としてアメリカ行政学の研究が中心だったわけです。(中略)でも、もうそういう時代じゃないだろうと。西尾先生に、日本のことを正面からやれと言われて、私も関心を持っていたので、やることにしたわけです。一番初めにこの種の研究をされたのは、橋本さんです」(p.271)という記述がある。森田が助手論文を書き上げたのは、80年前後のようであるが、これが後に『許認可行政と官僚制』として公刊されている。

橋本によると、「あとから振り返って、僕と同時期に大嶽秀夫氏がやはり博士論文で出されているんですけども、当時日本研究を始めたという点で「パイオニア」と言われると、「ありがとう」というのはありますが、自分の内部では、「それは橋本さん、誇りすぎで言い過ぎですよ」というのはあってね」(p.261)と控えめに表現している。橋本が博士号を取得したのは79年で、戦後日本の農業政策の研究である。

大嶽秀夫は、京都大学法学部から東京大学の法学研究科に進学し、70年から3年間シカゴ大学の大学院に在籍し、77年に東大から博士学位を取得している。そして79年に欠陥車問題などを扱った『現代日本の政治権力経済権力』が出版されている。

その大嶽と『レヴェイアサン』を創刊した村松は、79年に出版した論文に言及している。「自分の主張ですが、官僚制論の前があります。戦前戦後の関係を問題にする論点など「地方自治理論のもう一つの可能性」という論文を書いた時が出発です。その時も僕は、尼崎や京都市政の研究やそういうものがあって、自分としては情報は持っていると思って、政治を考慮した地方自治論ができると考えました。従来中央集権説は違うだろうと」(pp.42-3)。同年に村松は「政治的多元主義と行政官僚制」、「地方自治における二律背反——自律性と行政水準（または活動量）のトレード・オフ」をも公

にしており、『戦後日本の官僚制』が発刊されたのは81年である。

また大森章にも、78年から日本学術振興会共同研究事業「先進工業国における地方自治の政治化と中央地方関係の変容—日本・フランス・イタリアを中心として」がスタートし、日本側からの顔ぶれは高木鉦作、佐藤誠三郎、飽戸弘、村松岐夫、天川晃、寄本勝美であったこと、代表者の大森が、その成果である『日本の地方政府』（86年）の出版に苦労したことが述べられている。78年に出版された今村都南雄『組織と行政』は、アメリカ行政学の理論的検討が中心であるが、環境庁の設立過程と自然環境保全法案の作成過程の事例研究が含まれている。

このように1970年代の後半から、同時多発的に現代日本政治を実証的に分析するという動きが生じてきているのである。これらの研究と、大嶽が『戦後政治と政治学』、『高度成長期の政治学』で取り上げた日本研究との比較検討は今後の課題である。

終わりにかえて

前述の座談会では、加藤一明が、我々は何もなかったからそれぞれが穴を掘った、手ぶらでやってきた、という趣旨の発言を行っている。また阿利莫二がいろいろなデータをグラフ化して視覚的に構成する作業をしたところ、ある先生が「あれは女学生のやることだとおっしゃった」という話がある。このような時代からはずいぶん時間がたった。我々には方法論的な洗練さも加わっているだろうし、水谷三公のような比較歴史的な方法も進化していると思われる。そして前田健太郎流にいうと、「女性のいない行政学」の時代は去り、同様の企画が次回あるとしたら、調査される側に女性のプレゼンスがあるであろう。そのことを考えるためにも、貴重なオーラルヒストリーを残してもらった関係者の努力に感謝したい。